



「総合英語」教授法：  
学生にとっての「楽しい授業」を考える

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀江, 珠喜 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00005975">https://doi.org/10.24729/00005975</a>

# 「総合英語」教授法

## —学生にとっての「楽しい授業」を考える

堀江 珠喜

大学院博士課程設立にあたり1992年に府大へ呼んでいただき、2003年春には留学生に博士号をとらせたが、2005年からは大学院を離れ、総合教育研究機構（仮称）において英語のみを教えることになったので、これを機会に私流「総合英語」授業の進め方を、まとめておきたい。また学生から寄せられた意見も紹介するつもりなので、形式としては論文というよりもむしろ報告書とみなされるだろうが、実践的教授法を語るうえでは、やむを得まい。

私自身、いわゆる教育機関で「教授法」を学んだことがない。私の教え方は、あくまで私自身が英語やフランス語を学んだり、日本語や英語を教えてきた経験によるものである。その特徴は、「英語の授業においては、日本語禁止」というルールであろうか。

母校の神戸女学院中学での英語のクラスや、日仏学院及びパリ大学夏期仏語講座などでは日本語が使えなかったし、1975年に台北YMCAで日本語を教えたときにも、ずっと日本語で通したので、私にとってそのような外国語授業は当たり前であった。だが、まだ日本においては珍しいらしく、初回の講義で、大部分の学生は、教室に現れるや英語で挨拶をし、説明を始める教師の姿に、少なからぬショックを受ける。M.F.（農）にとっても、これは強烈な体験であったようだ。

最も印象に残っていることといえば、4月の最初の講義の時に「この授業はすべて英語で行い、また授業中は日本語を使ってはいけません」と英語で言われたことです。大学に入るまで、また大学に入ってから「英語のみを用いて」英語の授業をするということを経験したことがなかったので、驚いたのと同時に「これが大学の講義というものなんだろう」と新鮮な気持ちになったのを覚えています。<sup>(1)</sup>

大部分の学生には刺激的な始まりであり、受験英語にかなり自信を持つ者も身構え、私に一目置いてくれるようになる。もし私が机にぶつかったり、チョークを落とした瞬間に“oops!”と言え、さらに効果的である。

初回の講義にはまだ学籍名簿が用意されておらず、一覧表に学生の番号と姓名を記入させるのだが、その際、ヘボン式ローマ字でfamily name, first nameの順に書くように告げる。パスポート申請時にはヘボン式で名前を書かねばならないので、その時に恥をかかないようにスペリングを確認させておきたいのだ。

ただし彼らは小学校で訓令式ローマ字しか習っていない可能性が高いため、両者の違いを板書で説明し、b,p,mの前にはnではなくmを用いることなどを強調しておく。心齋橋の隣

はNanbaではなくNambaだから、次に乗るときには、しっかり確かめておくように、ただし有名なトヨタの「看板方式」の場合、kanbanで国際的に通用させてしまっているといった雑談をまじえることもある。このような英語による話が少しでも理解できれば、学生は嬉しいはずだ。一言も聞き漏らすまいとして、彼らはとても静かである。

英語の聞き取りが慣れていない学生に対して、①単純な言葉と文型で、②大きく明確な声で、③大事な事柄は特にゆっくりと、場合によっては繰り返す——といった心掛けが必要だが、それに加えて気をつけたいのは、こちらの表情だ。教師の笑顔は授業の雰囲気や和らげる。大部分の学生は、初めて体験する英語のみの英語の授業で、かなり緊張している。とくに府大の学生の場合は、これまで優等生として過ごしてきたため、極度に「失敗」や「マイナス評価」を恐れるきらいがある。まずそのような受講者をリラックスさせなければ、実力も引き出せない。リラックスした雰囲気や効用について、S.O. (社) は語る——「授業全体の雰囲気が実にリラックスしていたので、私も失敗を恐れず、話してみようという気持ちになりました。驚いたのは、そういうリラックスした気分だと、なんとか英語で会話できるのだなということでした」

教師の笑顔は、彼らをリラックスさせるばかりでなく、「楽しそうな授業」をも演出できる。最近、世間では「楽しい授業」が求められているが、これほどいい加減な表現もあるまい。本来、「知の楽しみ」こそが学ぶ喜びであり、達成感や充実感、自信や満足がその神髄のはずだ。もちろん私の授業においても、「自分の英語」を話すコツを学ばせ、「なんとかしゃべれそう」といういい気分させるのが目的であり、ちゃんと予習をし、授業中に居眠りもせず私の質問に答えようとした学生にとっては「楽しく」しかも「有意義」な1年間であるはずである。だが、彼らが実際に「できることの喜び」を知るまでには、せめて笑顔で、「楽しそうな」雰囲気を作るべきではないか。

さて一覧表にはfamily name, first nameの順に書くよう、繰り返して告げても、クラスに1～2名、ときには10名ほど、この指示の逆に記入する者がいる。そこで全員が書き終わると“Mr. (Ms.) ~”と呼名し、間違えた学生には“What is your family name?”と尋ね、海外旅行先で入国カード記入時に迷わないよう、自分のfamily nameとfirst nameを確認させる。ずいぶん初歩的な（バカみたいな）指導だが、できない学生がいる以上、将来、恥をかかさないうように教えておくべきであろう。

次に、彼らに私の授業のルールを申し渡す。最も重要なのは出席状況。通年授業で欠席または遅刻が8回になったら失格——つまり授業開始時に呼名し、返事がなければ遅れて来ても欠席扱いする。遅刻と欠席とが同じ扱いでは厳しすぎるとの声も少しはあるが、「皆が真剣に受講しているときに、ガタガタと音をたてて教室に入ってこられるのは迷惑」というのがルールの理由だ。こう決めると、学生も遅刻をほとんどしなくなる。W.M. (経) は一年間の私の授業をこう振り返る——「(印象に残っているのは) 遅刻も欠席の一つにはいるということで毎回大急ぎでこの教室に入ってきたことです。高校時代は毎日普通にできていたことが、こんなに大変に思えるのは気合いが足りないなあって思いました」

私は授業中、いかなる私語も許さないし、近くの教室のマイクやテープの音が大きくて邪

魔になるとときには、すぐに文句を言いに行き、廊下にいる学生がうるさいときには、叱り飛ばして追い払う。それも私の学生たちが必死に英語を聞き取ろうとしているときに、より良い環境を与えたいからで、このような私の信念を理解してくれる学生も少なくない。

英語での授業だと、より集中力が必要だし、大部分の学生は一生懸命に聞こうとする。T.K. (工) もこう述べている——「英語だけで授業をするのは初めてだったので最初のころはちょっととまどったが英語しか話さないので集中していないと何を言っているのか全く分からなくなってしまうので授業に集中できたと思う」。T.M. (農) も「質問や連絡事項もほとんど英語だったので、聞こうという意識が高まり、集中力も保てていたような気がします」と同意見だ。

次に聞き取りの苦手な学生は(嫌だろうが)できるだけ教壇近くに座った方が得だ、声が小さい者は私が聞こえるように前の方に座らないと不利になるかも、などのアドバイスとともに、翌週のための宿題を与える。宿題とは、英語で自己紹介の準備をすること。できればユーモアを交えて、できるだけ自分をアピールする。けれども書いた物を読んではいけない。あくまで易しく簡単な自分の英語で、しゃべるようにと念押しする。

さて当日は、自己紹介で終わるのではなく、必ず私からの“Do you have any brothers or sisters?” や “Who is your favourite singer?” などのような簡単な質問に答えなければならない。クラスの人数が多いので、2回目の授業では自己紹介とこのQ&Aしかできないが、同じような質問や単語が繰り返されるため、聞き取りの初歩的練習にもなるだろう。K.K. (社) は、「初めは内容が理解できるかとても不安だったが、初めの自己紹介では、皆、簡単な英語で内容が分かったので簡単な英語でもかなり感情や言いたいことが表現できることが分かった」と、英語による自己紹介の意義を認めている。

意外なことに大部分の学生には、それまで英語で自己紹介をしたことがなく、この体験はかなり印象に残るようだ。S.H. (社) にとっては初めてではなかったが、それでもこう述べている——「やはり授業で最も印象に残っていることは自己紹介である。英語の授業中に英語で自己紹介することは非常に久しぶりのことだった。思い出してみると高校1年生ぶりのことだったのである。……ただ少しちがったことは自己紹介の後に先生からの質問がはいったことだ。以前の経験からではこのようなことは全くなかったもので、これは私にとって大変印象的なことだった。又1年間同じ学部で勉強してきた人のちがった一面を見ることもできた。よく知っていると思っていた人の意外な趣味や近況を聞くのは楽しいことでもあった」

2年生のクラスにおいてもこのようなことから、ましてや新入生のクラスでは、これによって出身地や趣味が同じとわかり、授業が終わるや駆け寄って話し始める学生もいる。授業が学生間のコミュニケーションのきっかけとなるのは、教師にとっても嬉しい副産物である。

さて第3回目の授業では、私に対して質問をさせる。ただし政治、経済、宗教、科学、数学に関するものは避け、(私はプライバシーの侵害だとは言わないので)できるだけ簡単に個人的な質問を考えること、と指示する。それで茶目っ気のある男子学生たちは、性的な質問を考えたらしい表情を見せることもあるが、残念ながら彼らはそれを口にできない。とい

うのも質問に答えた直後に、私が同じことを質問者に問い返すからである。従って「初恋」について尋ねる者はいるが、それ以上の性的体験には、彼らは触れられなくなるのだ。

絶対に、といていいほど、どのクラスでも問われるのは“*What is your favourite colour ?*”である。で、“*I like black best*”と答えると「エー！」という声が沸き上がる。このような反応のあるクラスは、学力レベルが高いと考えられる。(とにかく、レベルの低いクラスは、いかなる反応も鈍いのだ。)

彼らがこう驚くのは、それまでの授業に私が着た服の色が、すべて派手だからだ。そこで私は続ける——“*Next to black, I like red, purple, and shocking pink.*”この順番は重要である。なぜなら私はそれまでに必ず一回はショッキング・ピンクの衣装をまとい、ときにはバッグ、靴、マニキュアまでこの色で統一して、かなり学生にインパクトを与えていたのだ。従って、この“*shocking pink*”という言葉は、いわば「落ち」のような役目を果たし、クラスの笑いを誘うのである。「落ち」だから、当然ながら最後に来なければならない。

またここで「笑い」を生じさせることも、「楽しい授業」の演出には効果的だ。我々は笑うことで「楽しい」と感じるし、その回数が多いほど(授業や教師に対する)好感度が増すものである。しかも(一応は)英語を理解して笑える自分が、カッコ良く思えてくるはずだ。

同様によくある質問は“*How old are you ?*”である。これは次のように展開される。  
“*Guess my age, but be careful ! Your grade depends on your answer.*”

レベルの高いクラスであれば、半数以上が笑う。

“*I think you are about thirty-five.*” (ここでもクラスに笑い)

“*Well, I think you are a very good student. (クラスは大笑い) In fact, I was born in 1954. (この数字は板書しなければ、ほとんどの学生は聞き取れない) How old are you ?*”

“*I am eighteen years old*”

“*Eighteen ! Then you are still a child*” (これでクラスは大爆笑となる)

50人クラスであれば、50種類の質問が私に投げかけられるわけで、授業の終わりには彼らはかなり私について詳しくなっている。よく知れば、親しみも増し、リラックスできるようになる。こうして何度も大笑いして、やっと4回目の授業で教科書を用いることになる。

私が好んで用いる教科書は2種類、世界的に評価されている文章の易しい文学作品と、ジョーク集である。これらを年間、1冊ずつ用いる。

前者は*Doctor Dolittle*, *Mary Poppins*, *Alice in Wonderland*, *Winnie the Pooh* や *Lafcadio Hearn*の怪談などだ。府大の学生なら、これらを読む英語力は充分にあるはずなのだが、受験英語とは全く異なる内容なので面食らい、想像力や文化的知識も必要なため、かえって困難を覚えることもあるようだ。いずれにしろ、将来、付き合うことになるであろう英米人にとって、「教養」あるいは「常識」ともいえるほど親しみのある物語なので、一生に一度くらいは原文に触れておくことも、決して無駄ではあるまい。ちなみに03年10月19日付の*Sunday Express*によれば、*Winnie the Pooh*は*Jane Eyre*や*War and Peace*などとともに英国人の好きな本ベスト21に入っているのだ。

この授業で、学生には次の5つの作業が求められる。

1. 子供たちに聞かせるように読む。上手な朗読は、巧くしゃべるための第一歩と思われるが、受験のために英語を勉強してきた彼らには、これまで声に出して読む機会が、ほとんどなかったようだ。また意外なことに、中学の授業においてすら、テープを聴くだけで音読や発音練習をしたことがなかった者もいる。けれども話すためのトレーニングとしての音読の必要性について、H. Y. (農) も次のように理解してくれた——「私はこの1年間（とくに後期）で、声に出して読むことの大切さと難しさを感じました。はじめは読みなんて考えなくてもいいから簡単だと思っていたけど、質問をつくるよりも難しいと思います。なぜなら、質問はある部分が理解できていればそこからつくることができますが、読みは全部理解していないとどこで区切っていいか分からず、たぶん通じない英語になっていることでしょう」

もちろん私が読んで聞かせることもある。A. T. (農) には、それが印象的だったようだ——「先生がこの本を読んでくれる時、心をこめて（登場人物のセリフとして）読んでいるのを聞いて、すごい、と思いました。私は日本語の文ならできるけど、英語の文章を登場人物になりきりって読むのはやっぱり、むずかしいです。英語の本を読むなんて、授業でもないかぎり、あまりできる事ではないので、こういう機会がもてて、とてもよかったと思います」。このように「すごい」と思わせると、授業は進め易い。

## 2. 内容を理解する。

3. 物語をもとにして、学生に疑問詞を用いた質問を作らせる。といっても、いきなりでは、どのようなことを尋ねていいのかわからないだろうから、最初の1、2章は、私が質問する。“Where did Pooh live?” などの、ごく簡単なものもあるし、“If you were Pooh, ……” と仮定法で問い、学生たちに想像させることもある。これにはとくに「正解」がないので、試験慣れした学生は不安に思うようだが、さまざまな楽しい答えが出てきて、雰囲気はなごむ。また自分の考えを、何とか英語で言えたことに、喜びを感じる学生も少なくない。

質問が理解できなかつたり、なかなか英単語が思いつかなくて、もどかしい思いをしている学生には助け船も出すし、易しい言葉に言い換えることもある。やる気のある学生が一生懸命に考えているときには、自分で答えを見つけるまで、とにかくにこやかに辛抱強くこちらは待つ。M. F. (経) は、そんな状況について、こう語る——「頭ではわかっていて、日本語でなら答えられるのに、なかなか英語がでてこなくて、いつもパニックしていました。それでも言おうとしたので変な文になってしまった時もありました。けれど先生が、わかりやすく助けをだしてくれたのですごくうれしかったことを覚えています」

また学生が答えられると“Very good!” を連発して励ますので、「相手にちゃんと通じ、しかもそれをほめてもらえた時は、本当にうれしかったです」と J. H. (社) のように学生は、愉快的気分になる。

学生に質問を作らせるのは、案外、そのような機会が教室では少なく、会話で疑問型の不得意な者が多いことに気がついたからだ。考えてみれば、授業ではたいてい教師が問い、学生が答えるというパターンが多く、学生が自由に疑問文を作る場面は、あまりない。だが、

実際に海外に出れば、わからないことだらけで、始終、人に尋ねなければなるまい。また友人との会話でも、疑問型は必要だ。

文法を頭では理解していても、教室でしゃべる段になると、“Why Pooh……?”と、助動詞を抜かしてしまう学生も少なくないのが現状だ。今までそのような口頭練習をしていなかったから仕方がない、ともいえる。だからこそ、私の授業では、この当たり前の簡単な英語をしゃべることに慣れさせたいのである。

4. 質問には、もちろん答えさせる。学生の質問には、別の学生が答えることになる。珍問・奇問が飛び出し、迷答に教室が沸くこともあるが、質問者は必ず「正解」を用意しておかなければならない。自分でも答えのわからないような問題を出すのは無責任だ。

5. 1章が終わるごとに、物語を英語で要約させる。といっても書かせるのではなく、あら筋をしゃべらせるのである。教科書を丸覚えする必要はない。それよりも「自分の英語」を使って話してみることが大事なのだ。

学生たちには4月の最初の授業で、こう説明する——「あなたたちの頭の中の引き出しには、中学や高校で習った英単語や英文法が詰まっているはずですよ。それらを使いこなせば、かなりのことが話せるのだけれど、そのときに必要な言葉の入っている引き出しが、うまく動いてくれないので、単語が取り出せない、つまり知っている英語なのに思いつかなくて悔しく歯がゆい思いをするでしょう。この授業では、多くの新しい単語を覚える必要はありません。それよりも、頭の中の引き出しが、必要に応じてさっと開くように、そしてこれまでに習った英語が、自分の言葉として活用できるようにしてゆきたいのです」

この「引き出し」という言葉は、S.Y. (社)には、とても印象的だったようだ——「教科書の内容がとてもユニークだと思いました。こんなのが大学生の英語の勉強でいいのだろうか……と。でも授業の最初にこの授業は今までつちかっていた英語の知識をためてある引き出しをスムーズに引っ張り出せるようになるためにするのだと聞いて俄然やる気が出ました」

さらに私は彼らに、次のように授業の進め方について説明する——「始めから、いい格好をして難しい英語をしゃべろうなどとは思わないで、まず simple easy English を、自分の言葉、自分の英語として使うようにしましょう。文型も、単純なもので結構。水泳の息つきと同じで、ちょっとしたコツさえつかめば、あとは自分の練習次第で上達します。一年間で、このコツを学んでください」

従って、質問に答える時も要約作業も、学生は「自分の英語」を用いることが奨励される。学生たちは、あら筋を各々少なくとも one sentence ずつ話していかなければならない。One sentence は短くてもかまわない。極端に言えば、“Pooh was very happy”でもよい。とにかく「自分の英語」を声に出して言うこと自体に、意義があるのだから。M.M. (経)は、この体験を次のように語る——「高校や中学校の英語の授業では、テキストを和訳したり、

問題を解いたりとかで、みんなの前で、テキストを読んだり、質問をつくって答えたり、その後には要約を自分なりの英語で述べてみるということもなかったもので、いつ自分の番が回ってくるか少し緊張しました。でも、上手くは話せないけど、自分なりに英語で話してみることができてすごく楽しかったです」

そう、「自分の英語」をしゃべるのは、楽しいことなのだ。やる気があれば one sentence ではなく、好きなだけ語ってよい。チャレンジ精神のある学生は、単独で最初から最後まで物語る。自ら進んでそうする者もいるし、この頃には各学生の実力や性格、やる気がだいたいわかっているのだから、こちらからあてて挑戦させる場合もある。もちろん初めは、彼らにとって、とても不安な作業に思えるのだが、あら筋を全部、「自分の英語」で語り終えたときの嬉しさは、ひとしおのようだ。C.S. (社) もこう述べる。——「英語は難しいけど、先生に一番簡単な言葉で自分の考えを伝えたらいいと言われてたら、すごく授業も面白くなった…だから *Tales of Pooh* の chap. I が終わったあと、一人で chap. I の概要を述べることができた。あのとき、ちょっと緊張していたけど、がんばって自分の言葉で全部述べていた。終わった後、すごく嬉しかった」

当然これは本人の自信にもつながるし、また他の学生へのよい刺激にもなる。ま、あの程度の英語でなら自分もしゃべれるかも、と考える学生もでてくる。もともと府大の学生には、しかるべき英語力が備わっているのだから、ちょっとした後押しで、会話の世界にも乗り出せるのである。

「今うまくしゃべれないからと言って、中学・高校で学んできた英語も受験英語も、無駄だったとは思わないように。これから英語をしゃべろうとするときに、やはり単語力や文法力は必要です。それがないと、低レベルの日常会話以上はしゃべれません」と、4月の初めに学生たちに言い聞かせることにしているが、確かに、難易度の高い学科の学生のほうが、会話においても上達するようである。もちろん学生の熱心さも、学科によって大いに異なり、やはりもともとレベルの高いクラスの方が、積極的にしゃべろうとする姿勢を見せる。

さて、もう1冊の教科書はジョーク集である。英語で仕事や研究の話をするのはいいが、最も苦手なのはパーティーなど社交の場だという日本人は多い。その原因のひとつには、あちらの「笑い」のセンスについてゆけないことがある。けれども英米では、まじめなスピーチにすらユーモアが要求されるので、若く頭の柔らかい時期に、このような感覚を磨いておくことは望ましい。

これまで学生たちが学んできた受験英語とは、全く次元を異にする発想や文化的知識を必要とするので、優等生にとっても、英語のジョークは難しいようだ。だからこそ勉強する価値があるので、初めから簡単に理解できるならば、わざわざ教室で取り上げる必要はあるまい。

授業では、それらの話のどこが面白いのかという点を、学生に英語で説明させることを目的とする。だが、日本語ではならともかく、英語ですぐには無理なので、まずはその話をもとに、様々な質問をし、だんだんこちらの求める答えに近づけてゆくこともある。これを繰り返しているうちに、ある程度は笑いのネタのパターンが、学生にもわかってくるようにな



る。よくあるのはヤブ医者、悪徳弁護士、説教の退屈な教師、生意気な子供、恐妻家、おしゃべりな女、ケチな男、酔っ払いの失敗、単なる駄ジャレを扱ったものなどである。身体的・民族的差別やセックスに関するジョークは、実社会ではかなり触れる機会が多いが、教科書にはほとんど載っていないし、あらかじめチェックし、もし不適當な話があれば、授業では省く。ただしユダヤ人についてのジョークは欧米社会を理解する上で重要だし、イスラエル大使館のパーティーでも、ユダヤ系の客たちは自分たちを笑いのネタにして楽しんでいたりするので、学生にもその旨を説明して取り上げている。

ときには、とても突飛な着想で、的はずれの解釈を披露する学生もいるが、それはそれでかまわない。英語によるコミュニケーションを学ぶことこそ1年間の目標なのだから、例え見当違いの内容でも、英語で答えるかぎり、学生に落胆させない。むしろオリジナリティや積極性を誉めることで、やる気を保持させるのだ。この点をA.H.(農)も心にとどめている——「答えは、あっていなかったのですが、先生は私の発言を“good”と言ってくれました。英語で発言したある事に対して、プラスの評価をされた時は、日本語でされるよりも充実感を感じたし、うれしかったです」

もちろん、正しく答えられれば、Y.N.(工)のように学生も嬉しいはずだ——「一番印象として残っているのは……初めて上手く答えられたことである。言葉は足りなかったが、自分の考えが伝わったのがとてもうれしく、印象に残った」

府大学生自治連合が2000年と2001年に実施した語学授業改善活動のアンケート「ガツン」によれば、私の学生たちの最大の不満は、クラスの人数が多いことである。これでは1回の授業で当たるのが1～2度となる。だが、自分の番でなくても、答えを頭の中で言ってみる、つまり頭の中の単語の引き出しを動かし続けて過ごすのと、何も考えないのでは、一年間たてば会話力に差がつく。このことも4月初め、学生に言っておく。やる気のある学生は、いつもこのように真剣に授業に取り組んでいるので、後期の終わりにはかなり満足できる効果が得られるはずだ。

また「自分の英語」にも自信を持ち始める。S.S.(工)も、そのひとりだ——「受験が終わり、受験英語から英会話へと切りかえていかなければならない時、自分で考えた英語を話すということが何よりも新鮮でした。もちろん今までに経験がないことですから最初はとまどいしましたが、うまく自分の言いたいことが表現できたときには快感すら覚えました」。同様にM.A.(農)も次のように述べる——「この授業で最も印象に残っていることは、先生がよく口にしていた“simple easy English”という言葉だ。私は英語が苦手なので、英語のみを使って行われる授業についていけるかどうか不安だったが、実際授業を受けてみると、意外に分かるもので、シンプルで易しい英語でもこんなに表現ができるものなのかと驚いた。またそれと同時に英語に対する苦手意識がだんだん薄れていったような気もする」

さらには、“simple easy English”が街で通じた体験に喜ぶA.H.(農)のような学生もいる——「私は昔から英語で話すのは得意ではないけれど好きです。だから、この授業で自分の発言が認められたり、その発言に対してプラスの評価をされて、うれしかったし……外国の方と少しでも会話ができるようになったと思います。難しい単語を覚えておかなけれ

ばいけないのではなく、簡単な単語で文をつくって話そうと思えたから、(話しかけられた時はどうしよう……としましたが)相手に私の英語を理解していただけたのだと思います。その外国の方は、英語で話しかけると、話しかけられた人はひるんでしまって、困っていたそうです。だから、私の英語が役に立ってよかったと思いました」

私が「総合英語」の授業で英語しか使わないのは、もちろん学生に英語によるコミュニケーションを学ばせるためだ。だが、マイナーな理由としては、有声音の連なる日本語より無声音の混じる英語のほうが、声帯に負担がかからなくて講義を続けるのが楽なのである。楽なぶん、パワーが保てるようだし、英語のほうが喜怒哀楽を込めてしゃべりやすく、身振りや手振りも自然に交えられるので、迫力が出る。こちらのこの「元気」は「やる気」として学生に伝わるように思われる。やる気のない教師のもとで、学生が勉強をしたがるわけがあるまい。

元気で明るく楽しいという雰囲気、英語が苦手と思いこんでいる学生にも興味を持たせ、しゃべってみようと言う気にさせる——このいわば「心理作戦」が、私の授業法の要なのであり、M. Y. (社)の次のような意見を聞くかぎり、私の目論見はまずまず成功しているようだ——「英語がとても苦手な私は大学での英語にとっても不安を抱いたので、『この授業では英語しか使ってはいけない』と先生がおっしゃった時、とてもあせってしまいました。でも先生の英語を聞いているうちに、先生の英語がとても分かりやすい表現が使われていて、なおかつそれでもわからなかったらより易しい単語やジェスチャーを加えてくださったことによって、とてもリラックスして聞くことができ、英語に対する苦手意識も薄れたように思います。英語だけの会話でも十分理解できるのだという自信がついて、この授業はとても楽しかったです」

このように、授業における「楽しさ」とは、教師から与えられるのではなく、学生の内部から湧き出てくる自信や充実感によるものなのである。

(注)

(1) 毎年学年末に、私は学生たちに「この授業で最も印象に残っていること」について書かせている。本論では、ここ2-3年のものからの意見を引用した。これらは決して特殊な感想ではなく、多くの学生が同様に感じている。また学生の個人名や入学年度もわかっているが、プライバシー保護のため、イニシャルと学部名のみを記すことにした。

# An Essay on English Education

Tamaki Horie

In my English classes students are not allowed to use Japanese. This is quite natural and familiar to me for I learned English in the similar way in Kobe College Junior and Senior High School, and French at the French-Japanese Institute, but usually Japanese teachers wonder how I teach them. So, instead of a comparative literature essay, I want to sum up my way of teaching English and introduce some students' opinions of my classes.

Usually, in a year course, I use a book of English jokes and one of the famous stories like *Dr. Dolittle*, *Alice in Wonderland*, *Winnie the Pooh*, *Mary Poppins* or ghost stories by Lafcadio Hearn. As for the latter type of books, students are required to read aloud beautifully, as well as understand the story. Then, they must make questions to which other students answer. I add some questions if necessary.

When we finish one chapter, they must make a summary of the chapter, not by writing, but by speaking. I tell them not to read the book or not to remember the sentences from the book, but to use "their simple easy English."

They have already studied English for more than six years and know enough words and grammar, but their problem is that they cannot pull out the suitable words from their brain when they try to speak English. So, in my classes they are trained to make use of the words which they already know, and students are encouraged to speak English even if their answers are not the correct ones.

They have a hard time with English jokes because their sense of humour is different from native speakers of English, and in order to understand jokes you have to know the cultural background. When they read the book of jokes, they are asked to explain the funny point with "their simple easy English."

The students of O.P.U. are usually afraid of making mistakes in the class and get nervous, so I try to make them relaxed and feel easy. Then they begin challenging to speak English. When they can express themselves with "their simple easy English," they are satisfied with the result, gain confidence in their oral English abilities and, in turn, they can surely enjoy the class. By this method, they will appreciate the pleasure of learning English, which is my purpose of teaching.